佐々木邦全集

木邦全集

補巻二

佐々木邦全集　補巻2　無軌道青春　村の名物　人生の年輪

昭和五十年　九月　二十　日　第一刷
昭和五十年十一月二十八日　第二刷

著者　佐々木邦

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)　振替東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社大進堂

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©佐々木孝雄　一九七五年

定価は外箱に表示してあります（文2）

目次

無軌道青春　5
人生の年輪　207
村の名物　359
解説・岡保生　401

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

無軌道青春

先輩・後輩・同輩

「光岡さんですね」
私は稍〻驚いて、直ぐに言葉をかけた。隣りへ腰を下した男があったから、振り返ったら、何うも見たことのある横顔だと思った途端、お互の視線が行き当ったのである。
「やあ」
「お久しぶりですな」
「君は誰ですか？」
「僕は……」
と私はこゝで考えた。此方が知っている積りなのに、真向から名前を訊かれるのは拍子抜けのするものだ。忘れているのなら、そのまゝにする方が宜かったと思ったのである。
「自分の名前を考えているんですか？」
「僕は稲垣です」
「はゝあ」
「もう御記憶がないかも知れません」
「稲垣何君ですか？」
と光岡君は私の顔を凝っと見据えた。矢っ張りいけない。私は余計なことをしてしまったと思ったが、今更仕方がなかった。
「小三郎です」
「稲垣小三郎君と？」
「郷里の中学校でズッと後輩ですから、御記憶はない筈です」
「君」
「何ですか？」
「こゝは大学の教室ですよ。頭の好い積りの連中が揃っているんですから、然う繰り返して他の記憶力を疑うものじゃありません」
「失敬しました」
「気をつけることですよ」
「はあ」
私は飛んだ奴にかゝり合ったと後悔した。光岡君が大威張りで極めつけたものだから、前の机の学生が振り向いた。興味を持って聴いているのらしい。第一時間の講義が終って、次の先生が十分後れる癖だから、未だ一寸間がある。
「冗談だよ、君。ハッハヽヽ」
「もう宜いです」
「ハッハヽヽ」
「……」
「矢っ張り兄貴に似ていて直ぐに憤る。冗談が分りませんな。稲垣君、君は格之助君の弟さんでしょう」
「然うですよ」
「小三君だ。小三々々って兄さんが言っていたじゃありませんか？」

「矢っ張り覚えていらっしゃるんですね」
「忘れやしませんよ。郷里には稲垣が多いですから、何の稲垣君だろうと思って考えていたんです。君は確か一年だった。二年だったかな？」
「一年と二年でした。あなたが五年の時でした」
「よせやい」
「はあ？」
「僕が五年を二度やったと言わないばかりじゃないか？壁に耳あり、南瓜に目ありだ。お手軟かに頼むよ」
　と光岡君は私を窘めるよりも前の机の学生二人に当てつけたのらしかった。
「……」
「君は高等学校は何処から来たんだい？」
「矢張り郷里です。あなたは一高でしたな」
「うむ。以来郷里とは縁が切れてしまった。尤も叔父に監督して貰う積りで行っていたんだから」
「叔父さんは惜しいことをしましたな」
「うむ。代議士になって調子が好かったものだから、酒を食い過ぎたんだよ」
「僕は兄貴について、あなたのところへ一二度行ったことがあります」
「それで僕も覚えているんだよ。格之助君は京都だね？」
「はあ。しかしもう……」
　と言いかけて、私は気がついた。相手が大変後れているのだから、それを又思い出させたくなかった。
「卒業かい？」
「はあ」
「目下就職難ってところだろう？」
「いや、去年出て、大阪で会社へ入っています」
「早いな。尤も順当に行けば、それが当り前だ。しかし驚いたよ」
「何ですか？」
「僕は少し呑気過ぎる。格之助君の弟の小三君と同級になってしまったんだからね。考えて見ると後れたものだ」
　と光岡君は歎息した。
「しかし……」
「何だい？」
「あなたのは後れ方が違うんでしょう？」
「うむ。これでも落第はしたことがない。試験を受けないばかりだ」
「先学期も来ていらしったんですか？」
「いや、ズッと休んで、今日初めて出て来たんだよ」
「はゝあ」
「妙な廻り合せだね。一年後れてさ、春から休み続けてさ、初めて出て来たら、君に会ったんだ。好い見せしめだよ」
「そんなこともないでしょう」
「これからは少し勉強する。宜しく頼むぜ」
「僕こそ」
「昔馴染ってものは好いものだね。直ぐに斯ういう具合に話せるんだから」
「はあ」
「僕は年が寄ったろう？」
「然うでもないです」

「君は見違えるくらい大きくなったよ」
「ハッハ、、」
その日はそれ丈けだったが、光岡君は以来大抵毎日出席して、私と顔を合せた。
「何うだい！　小三君」
と先方は遠慮がないが、此方は兄貴の同級生という頭があるから、
「やあ。光岡さん」
と自然改まる。光岡君は間もなく、それはいけないと言い出した。
「しかし先輩ですから」
「以前は先輩でも今は同輩で、将来は後輩になる運命を持っているかも知れない。光岡、貴様とやってくれ給え」
「然うは行きません」
「それじゃ光岡君と呼んでくれ。光岡さんと言われると、気が引けて困る」
「光岡君」
「何だい？」
「矢っ張り具合が悪いです」
「構わないよ。僕も稲垣君とやる。稲垣君」
「何ですか？」
「講義をすっぽかして、何処かへ遊びに行こう」
「厭ですよ」
「冗談だよ。ハッハ、、」
と光岡君は周囲に構わず笑った。
私は光岡君と同級になったことを手紙の序に大阪の兄貴へ報告してやった。兄貴は筆無精にもかゝわらず、直ぐに返事を寄越した。余程慌てたのらしい。光岡と一緒とは驚いたと告白した後、
「光岡と交際してはいけない。兄貴が然う言ったと明言して置く方が宜い。友人のことを悪く言うのではないが、彼氏はお前に好い感化を与える代物でない。それにあゝいう金持の息子と交際するのは精神的にも物質的にも負担になる。この手紙一読次第、敬遠主義を取ってくれ。今まで大学にブラ〳〵していて、而も未だ第一回生というのなら、後進の模範にならないことは確実だ。それ丈けでも分っているじゃないか？　僕は中学時代に同級だったから、よく知っているが、彼氏は俗に言うお調子者だ。煽てられると、途轍もないことをやり出す。僕は彼氏の為めに多大の迷惑を蒙っている一人だ。僕ばかりじゃない。同級生は大抵彼氏の巻添えを食っている。三年の時、十人ばかり揃って一カ月間停学を命じられたのも、全く彼氏のお蔭だ。僕達は西方寺の墓地で試胆会をやった。彼処は淋しい。一人々々一番奥の方のお墓へ行って、昼間用意して置いた証の品を取って来る。未だ子供だから皆怖々だったが、兎に角、順番を終って、息をついた。それで帰って来れば宜かったのに、誰だったか『この中で一番度胸の好いのは光岡だろう』と言って煽てた。すると光岡は『待ち給え。僕は君達に出来ないことをして見せる』と言って、又墓地へ入って行った。僕達は可なり長い間待っていた。光岡は新墓の墓標を引っこぬいて、ヨチ〳〵担いで来た。驚いたよ。同時に坊さん達が追っかけて来た。『それッ』と皆逃げ出したが、僕は尻餅をついて、取っ捉まってしまった。小坊主に撲られて、泣きながら、お寺へ引かれて行った。警察

へ突き出すと言うんだ。墓地を荒すものは死刑だと言うんだ。僕は弁解したけれど、先方は憤っているから耳に入れない。しかし警察丈けは堪忍して貰って、学校へ電話をかけた。宿直の先生が駈けつけて、あやまってくれた。それで表向きは済んだが、僕達十名は処罰として一ヵ月間の停学を食った。僕はこれに懲りれば宜かったんだが、光岡は必ずしも不良でないから、相変らず親しくしていた。彼氏の弱点は寧ろ善良過ぎることにある。人間が生一本だから、直ぐに煽てに乗る。奇妙な名誉心を持っている。人と違ったことをして褒められたいんだ。何処か少し足りないのかも知れない。奴は馬鹿だという説もある。しかし考えて見ると、その巻添えを食う此方も余り悧巧じゃない。五年の時、又引っかゝってしまった。大砲事件だ。これはお前も知っている。僕達五名は火傷をした上に、一学期間の停学を命じられた。丁度三学期だったから、学年試験が受けられない。僕はその春高等学校へ入ったから宜かったが、他の連中は光岡の巻添えで一年後れた勘定だ。あれ以来皆はもう警戒して、敬遠主義を取り始めたらしい。僕もその頃二三度会ったきり、以来音信不通だ。彼氏は悪い人間ではないが、危い人間だと思っている。意志が弱いんだ。中学時代には僕達が傍で煽てゝやったから、成績も相応だったけれど、元来自力で奮発の出来ない男だから、未だに大学にマゴ〳〵しているんだろう。あゝいう性格で金の自由の利く境遇だから、長いこと停滞している間に不良化しているかも知れないよ。然うした彼氏とお前が毎日机を並べていると聞いて、僕は寒心に堪えない。兄貴が宜しく言わなかったと言ってくれ。これ丈けで彼氏には充分意味が通じる、諒としてくれる理由があるんだ」

と興奮して、長文の筆を結んであった。

それで私も考えた。兄貴の註文通りを伝えれば、光岡君は気を悪くするに定っている。先方が好意を持っていてくれるのに、そんな挑戦的な態度に出る必要はない。それよりも交渉を教室内に限る方が宜い。幸い未だそれ以上に進んでいなかった。同じ机に並んでいても、日に一寸宛敬遠すれば、一月に三尺の距てが生じる。その中には先方が休んで縁が切れるかも知れない。勉強家でないことは分っている。私は相手の感情を害さないようにして、兄貴の忠告に従う積りだった。

「稲垣君、僕は君にお礼を言わなければならない。君のお蔭でこの頃は好い習慣がついたよ」

と光岡君は此方の肚の中を知らずに、打ち解けて話しかける。

「何ですか？」

「君が待っていると思うと、学校へ出て来るのが楽しみになった」

「ナカ〳〵御勉強ですな」

「これでもやる気になればやるんだよ。決心がついたよ、イヨ〳〵」

「何の決心ですか？」

「卒業する決心さ」

「はゝあ」

「驚いたろう？」

「はあ。尠からず」

「ハッハヽヽ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「矢っ張り境遇が違うんですな」
「法律でも経済でも、人に習わせて置く方が早い。自分でやったって、いざという場合の間に合わない。何うせその道の大家を頼むんだからね」
「資本家の立場からなら然うでしょう」
「いや、一個人としての見地から考えても然うだよ。学校の講義なんて高の知れたものさ。その辺の古本屋へ行けば、幾らでも売っている。悉皆鵜呑みにしたところで何の足しにもならない」
「それじゃ学校へなんか来ない方が宜いじゃありませんか？」
　と私は少し癪に障った。少くともこれは四年も後れている人間から聞かされる議論ではない。
「君、決心がついたんだよ、来る方の」
「……」
「君は矢っ張り兄貴に似ている」
「何ですか？」
「直ぐに憤る」
「憤ったんじゃありません」
「まあ〳〵、聞いてくれ給え。僕は学校ってものに重きを置いていない。しかし学問を馬鹿にして卒業しなくても、世間では然う思ってくれない。奴は馬鹿で学問が出来ないから卒業しないんだと思う。そこで僕は考えたんだよ」
「はゝあ」
「例えば縁談だ。貰いたいのが幾人もあるから当って見たら、何れもこれも大学を出ていなければ厭だと言うんだ」
「ハッハヽヽ」
「今の分際じゃテンデ問題にならないから、イヨ〳〵卒業する決心がついた。というと動機が聊か薄弱だけど、入学した以上は卒業するのが当り前だから、今更変説したことにはなるまい」
「入学して置いて卒業しないというのが既に動機不純で変説でしょう？」
「ひどく来たね」
「入学した以上は停滞しないで卒業するのが当り前ですよ。理窟をつけるのは間違っています。何か為めにするところがあるからでしょう？」
「参ったな、これは。まるで譴責だ」
「遠慮をしない約束ですから」
「それじゃ決心という言葉は取消して、順当の精神に戻ったと改める」
「年来の迷いが晴れたんです。自分を特別誂えのように思っているのが一番いけません」
「君は兄貴よりも厳しいよ」
「ハッハヽヽ」
「しかし気に入った。何でも思い通りを言ってくれる」
「先輩に対して失敬ですけれど、僕は調子を合せるのが嫌いです」
「もう先輩じゃない。同輩だ。宜しく頼む」
「簡単明瞭ですよ。出席して講義を聴いて試験を受ければ宜いんじゃありませんか？」
「それにしてもさ。道連れがあると、励みが出る」
　と光岡君は何処までも私を頼みにしている。敬遠が利かない。

「あなたは友達がないんですか？」
　と私は序をもって訊いて見た。
「あるさ。あるといえば、僕ぐらい友達のある人間はないよ。何年も停滞しているから、同級生の多いこと類がない」
「成程」
「しかしないといえば、僕ぐらい友達のない人間はないよ。同級生が皆失敬して先へ行ってしまうから、此方が一人取り残される勘定だろう」
「成程」
「あるようでなし、ないようでありさ」
「郷里の連中は何うですか？　中学時代の」
「寄りつかないね。尤も僕の方でも寄せつけない」
「何故ですか？」
「懲りてしまった。僕ぐらい友達の為めに災難を食っている人間はない。中学時代を思い出すと、停学処分の連続だ。それだから、不良のような印象を残して来たが、あれは皆友達が悪かったからだ」
「兄貴なんかも御迷惑をかけた方じゃなかったですか？」
「君の兄さんにはひどい目に会っている」
「はゝあ」
「君を前に置いて斯う言っちゃ済まないけど」
「構いませんよ」
「五年の時には停学どころじゃない。命が危かった」
「大砲事件でしょう。僕は知っています」
「実に無法なことを思いついたものさ。公園に置いてある戦利品の大砲に火薬を詰めて打っ放そうってんだ」
「新聞に出ましたね」
「うむ。火薬陰謀さ。あれはガイ・フォークスの話から考えついたんだから、西洋歴史の先生にも責任がある」
「しかし先生が奨励したんじゃないでしょう？」
「ガイ・フォークスの火薬陰謀を臨時試験に出したんだよ。皆それが出来なかったものだから、一つやってやれってことになった」
「乱暴ですな」
「群集心理さ。しかしあれが手製の火薬だったから、片山君の頭が禿げたぐらいで済んだんだよ。真物が手に入ったら、大砲が爆破して皆死んでいる。後から叱られて、成程と思い当ったが、実に向う見ずをやったものさ」
　と光岡君は尚おその折のことを話し続けた。
「その一番ひどく火傷をした片山って人は米屋をやっていますよ」
「うむ。家が米屋だった。頭の毛が生えたかい？」
「いや、禿げています。屹度あなたを恨んでいるでしょう」
「僕を恨んだって仕方がない」
「誰が張本人ですか？」
「群集心理さ。誰ってこともない」
「兄貴はあの為め一年後れるところでした」
「僕達は本当に後れたよ。悧巧な奴は立ち廻りが上手だから、損をしないけれど、僕は受難性に富んでいるから、取っ捉まったが最後、屹度重いんだ」
「評判でしたよ、光岡さんといえば」
「いつも群集心理の責任を背負わされるものだからね。それで懲りたんだよ。友達は選んで附き合わなければいけな

い。君も気をつけ給え」
「はあ」
「君はナカ〳〵交際家のようだね」
「そんなことはないです」
「しかしよく皆と話をしている」
「同じ高等学校から来た連中丈けです」
「僕を紹介してくれないか？　君の友達なら大丈夫だろう」
「その中に追々」
「何人いるんだい？」
「四五人です」
「郷里の中学を出たものもいるのかい？」
「一人います。僕と同級生です」
「それなら僕を知っている筈だ」
「知っているから、恐れをなしているんです」
「然ういつまでも先輩扱いをしなくても宜いんだ。今度その男をつれて、僕のところへ遊びに来ないか？　一晩郷里の話をしよう」
「御免蒙ります」
「何故？」
「招魂社あたりの大砲へ火薬をつめる相談が持ち上ると大変です」
「馬鹿を言っている」
「ハッハヽヽ」
と私は思いさま笑ってやった。
光岡君と私の交際はその学期中教室内に限られた。時々誘われたけれど、私は決して応じなかった。しかし、お互としては可なり親しくなった。敬遠しようと思っても、接近して来るから仕方がない。それに光岡君はもう休まなかった。
「何うだい？」
「相変らずだよ」
「いや、君の方じゃない。僕のことだよ。僕は君との約束を守っている。感心だろう？」
「何の約束だい？」
「几帳面に出席している」
「それは当り前だよ。皆毎日来ているんだから」
「何うも君は同情に乏しい」
「同情しようもないじゃないか？　君が学校へ来るのは君の為めだ」
「然う理責めに言ってしまえば、それまでだけど、僕が毎日規則正しく学校へ出るってのは何年にもないことだ。家中皆感心している」
「それは君が年来怠けものだったからさ」
「その年来の怠けものが昨今のように一心不乱の勉強家になったんだから」
「一心不乱でもないぜ」
「兎に角、欠席しなくなったことは事実だろう？」
「それが何うしたと言うんだい？」
「これは偏えに君の感化力だよ。君は豪い」
「煽てゝも駄目だ」
「本当だよ、僕は感謝している」
「その代償として感心しろと言うのかい？」
「先ずその辺さ」

「よし。褒めてやる。天晴れ〳〵」
と私達はもう先輩も後輩もなかった。
「稲垣君」
「何だい？」
「君、今日僕のところへ遊びに来てくれないか？　いつもは僕が誘うけれど、今日は違う。母と妹が君に会いたいと言うんだ」
と或日光岡君が申出た。
「母と妹？　何ういう経緯だね？」
「この間から話している通り、僕が更生一新したものだから、家のものは皆驚いている。家ばかりじゃない。親類中の評判だ」
「ふうむ。学校へ出るようになったのが更生一新かい」
「然うさ。父が僕の部屋へ入って来て、『今まで小言を言ったのは決して悪しかれと思ったんじゃない』って妥協を申込んだくらいだ」
「甘いんだね、君のところは。君のような息子が出来る道理だよ」
「君は事情を知らないから、何でも簡単に片付けてしまうんだよ」
「何んな事情があるんだい？」
「それもゆっくり話すから、来てくれ給え」
「折角だけれど、お断りする」
「何故？」
「意味はない」
「あるだろう？　僕が幾度誘っても、厭だと言うからには、何か含んでいるんだ」
「気が向かない丈けさ」
「いつになれば気が向くんだい？」
「さあ。永久に向かないかも知れない。毎日会うんだから、ここで話せば宜いじゃないか？」
と私は方針が定めてあった。
「家のものが君に会いたがるのは好奇心だよ。無理もない。君を何んな豪い人間だろうと思っている」
「分らないね」
「僕に感化を与えたからさ。更生一新させたからさ」
「君、学校を休まないなんてことは小学生でもやっているぜ。更生一新でも何でもない」
「君は僕の事情を知らないから、そんな同情のないことを言うんだ。兎に角、僕は君の為めに発憤して、以来尠くとも人並みに勉強している」
「それは君の勝手だよ。僕は忠告も何もした覚えがない」
「当り前さ。開き直って忠告して見給え。直ぐに喧嘩になる。先輩だって何だって容赦はない。正面から来れば、蹴飛ばしてしまう」
と光岡君は非常な勢いで言った。一寸本領を発揮したのらしい。
「ふうむ」
「僕は元来然ういう性分だ」
「それじゃ忠告すれば仲違いになるんだね？」
と私は念を押して置く必要があった。
「いや、君丈けは別だよ」
「何うして？」
「信用してしまったんだ。君は豪いところがある」

「何処が豪い？」
「さあ。何処ってことは言えないが、漫然と豪い。要するに人格者だ」
「無暗に評判が好いんだね」
「僕はいつかも話した通り、同級生の多かったこと無類だから、友達も多かった次第だが、君のような人格者は初めてだ」
「よしてくれよ」
「本当だよ。お世辞でも何でもない。家のものも皆認めている。今までに僕に好い感化を与えた友達ってものは一人もなかったんだ。友達といえば危いものに定っていた。悪いことを発起して、此方を群集心理の犠牲にする。しかし君は違う。僕を発憤させてくれた。それも忠告じゃない。暗々の裡だ。それだから豪いんだ」
「して見ると、人格者かな、これでも」
「しかし余所へは通用しないよ」
「ふうむ？」
「僕に丈けだから、余り己惚れない方が宜い」
「上げたり下げたりだね」
「蛇のようなものだよ。あれは蛙に対して人格者だ」
「おや〳〵」
「僕は初めの中休みたくなったけれど、稲垣が睨んでいるからと思い直して出て来るようにしていたんだ」
「睨んでなんかいなかったよ」
「そこが蛇さ。蛙の方では矢っ張り睨まれていると思うから感化を受ける」
「それじゃその蛇を見たいというんだね？　君の母や妹が」
「然うさ。それだから好奇心だと言うのさ」
「そんなところへ行くものか？」
「いや、君を蛇だとは言ってない。これは今説明の為めに思いついた譬えだよ」
「兎に角、お断りだ」
「仕方がない。それじゃ気の向いた時来て貰おう。人格者ってものはナカ〳〵むずかしいものだ」
　と光岡君は諦めた。
　私は長虫に譬えられても、人格者だと褒められゝば、悪い心持がしない。ツラ〳〵自己を吟味して見て、多少その傾向があるのだろうと思った。中学校は一年から四年まで品行方正学業優秀で通して、高等学校から大学へも聊かの渋滞なく進んで来ている。光岡君とは正反対だ。申分ない。親父も兄貴よりは私に望みを嘱している。矢っ張り然ういうことが自然に現れて、光岡君に感化を与えたのかも知れない。一体人格者というものは自分の人格を意識していない。頭の好いものは頭ってことを考えない。悪いものは頭痛がして常に頭の存在を意識させられる。
「これは面白い。自己を発見した」
　と私は自惚れではないが、少し自重するようになった。古本屋を素見して、碧巌録講義というのを買ったのもその為めだった。これは修養書だと聞いている。人格ということに気がついたから、一つ磨きをかけようと思い立ったのである。
「君は変なものを読むんだね」
　と或晩堀越君が遊びに来て怪しんだ。堀越君は中学校か

らの同級生だから、私の人格をよく知っている筈だ。
「面白いよ」
「分るかい？」
「斯ういうものは人格で読む」
「柄にないことを言うんだね」
「学問も大切だけれど、先ず人間を拵えてかゝらなければ駄目だよ」
「そんなことは君から聞くまでもない」
「実行しているのかい？」
「いや。耳にタコが寄っている」
「一つ僕と一緒にやらないか？」
「何を？」
「精神修養さ」
　と私は水を向けた。堀越君が私の人格について何ういう見積りをしているか、それを知りたかったのである。
「今更何だい？」
「え？」
「柄にないよ」
「君がかい？」
「僕も君もさ。それよりも出掛けよう」
「何処へ？」
「銀ブラは何うだい？　久しぶりで」
「さあ」
「今日は懐ろが温いから、何処へでも案内する」
「カフェーかい？」
「うむ。君の柄に合うところだ」
「悪友だな」
「何とか言っていやがる」
　とこれが堀越君の見積りらしかった。
　それから間もないことだった。日曜の朝、私は堀越君を訪れる積りで玄関へ出た。靴が汚れていたから、女中が拭いてくれる間、待っていた。そこへ立派な老紳士が自動車から下りて入って来た。
「お家に稲垣小三郎って方がいらっしゃいますか？」
「はあ」
　と女中は立ち上って、私の顔を見た。
「僕が稲垣です」
「これは〳〵」
「あなたは何方でいらっしゃいますか？」
「申し後れました。光岡です。卓爾の父です」
「はゝあ」
「お礼を申上げたいと思って伺いました」
「恐れ入りましたな。これは」
　と私は尠からず慌てた。光岡君のお父さんは大きな会社の社長だ。本郷の安下宿へ姿を現す人でない。
「お差支なければ」
「はあ。何うぞ」
「それでは」
　と光岡氏は上り込んだ。
　私は二階の部屋へ案内して、自分の座蒲団を推し薦めた。
「汚いところでございます」
「いや、何う致しまして。学生時代はこの程度のところで修業しなければいけません」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com